

生活・サービス

国立病院機構旭川医療センター（北海道旭川市）は神経内科医が常勤する国内最北の病院だ。体を思い通りに動かさなくなるパーキンソン病は専門外来も備えており、入院患者数は全国でもトップクラス。新薬の

医療・介護 最前線レポート

臨床試験（治験）にも積極的に参加している。一人ひとりの患者に寄り添ったチーム医療を重視し、北海道の広いエリアで存在感を發揮している。パーキンソン病は安静にしていても手足が震え、筋

国立病院機構旭川医療センター（北海道）



木村隆 統括診療部長

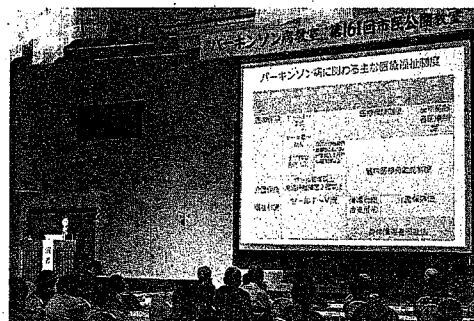
《施設概要》
▽所在地 北海道旭川市花咲町7の4048
▽電話 0166・51・3161
▽病床数 310床
▽診療科 脳神経内科、呼吸器内科、外科、消化器内科、外科、糖尿病内科、代謝内科、循環器内科など17科

パーキンソン病で存在感

肉がこわばるといった症状が出る。動作が緩慢になり、体のバランス感覚が悪くなる患者も多い。運動以外でも嗅覚の低下や睡眠障害、感情障害など様々な症状を引き起こす。脳内の神経伝達物質であるドーパミンが少なくなることでのような症状が出るが、発病の明確な原因はわかっていない。厚生労働省の2014年の調査では、国内の推定患者数は16万3000人。男女とも約50歳以降に発症する例が多

わかっていない。厚生労働省の2014年の調査では、国内の推定患者数は16万3000人。男女とも約50歳以降に発症する例が多

院患者は入院患者以上に多く、09年度には院内にパーキンソン病センターを開き、診療体制を強化した。木村部長がセンター長を務めている。現在の薬は脳内のドーパミンを補うタイプが主流だが、長期の服用が続くと薬が効く時間が短くなるという課題があり、新薬の開発が進んでいる。同センターは新薬の治験にも積極的に参加する。「09年以降の新薬は臨床試験を全て実施した。いくつかは全国で一番多く試験している」（木村部長）という。現在は4種類を試験中で、1日の中で症状が良くなったたり悪くなったたりす



毎年開催する市民公開教室は参加者が増加傾向にある（5月、旭川市内のホテル）

る日内変動の緩和に焦点を当てる。患者は神経の動きを画像化する核医学（R1）検査などで病気を診断したり、リハビリに取り組みたりする際に入院する。複数の治療薬を飲むことが多いが、症状が改善しない場合に薬の選択を変える時も入院が必要になる。

「病気を知り、上手につきまわってほしい」。木村部長は患者や家族の理解を助ける情報提供活動に力を入れる。治療薬は症状を改善するが治癒はしない。薬を服用してリハビリを続ける必要がある。「正しく継続するには正しい情報が必要」と説く。このうち、年1回は市民公開教室を院外で開催する。発症していない市民も対象に病気への理解を深める啓発に努める。こうした活動を支えるのは医師だけでなく看護師やスタッフが協働するチーム医療があつてこそだ。栄養士もその一員。センターではたんばく質の含有量を調整して薬の吸収を高める食事に配慮している。

「病気を知り、上手につきまわってほしい」。木村部長は患者や家族の理解を助ける情報提供活動に力を入れる。治療薬は症状を改善するが治癒はしない。薬を服用してリハビリを続ける必要がある。「正しく継続するには正しい情報が必要」と説く。このうち、年1回は市民公開教室を院外で開催する。発症していない市民も対象に病気への理解を深める啓発に努める。こうした活動を支えるのは医師だけでなく看護師やスタッフが協働するチーム医療があつてこそだ。栄養士もその一員。センターではたんばく質の含有量を調整して薬の吸収を高める食事に配慮している。

毎月開く院内（旭川支局長 稲田成行）